

漱石の岳父・中根重一の研究 (2)

—県立新潟医学校教師からドイツ語翻訳官へ—

橋川俊樹

(1) 明治初期「ドイツ派」の台頭の中で

漱石夏目金之助が、好きな漢文学から「英語」「英文学」へと人生の舵を切ったのは、在籍していた二松学舎をやめた明治15年(1882)、数えの16歳ごろの事である。

〈元来僕は漢学が好で随分興味を有って漢籍は沢山読んだものである。今は英文学などをやって居るが、其頃は英語と来たら大嫌い手で取るのも厭な様な気がした。……考えて見ると漢籍ばかり読んでこの文明開化の世の中に漢学者になった処が仕方なし、別に之と云う目的があった訳でもなかったけれど、此儘で過ごすのは充^{つま}らないと思う処から、兎に角大学へ入って何か勉強しようと決心した。〉
(談話『落第』)

この決断には、養父宅で塩原から「もうこっちへ引き取って、給仕でも何でもさせるからそう思うがいい」(『道草』九十一)と言われた「酷薄」な言葉も影響していただろう。

しかし、明治12年に入学した東京府内で唯一の中学校を1年くらいで退学していた漱石が将来、大学に入るためには、嫌いな「英語」での入試をクリアしなければならない。16年の夏には「成立学舎」という当時の受験予備校に入り、「英語」を勉強した。

〈僕も大いに発心して大学予備門へ入る為^に成立学舎……へ入学して、殆んど一年ばかり一生懸命に英語を勉強した。ナショナルの二位^{くらい}しか読めないのが急に上の級^{クラス}へ入って、頭からスウキントンの万国史などを読んだので、初めの中^{うち}は少しも分らなかったが、其時は好な漢籍さえ一冊残らず売ってしまい夢中になって勉強したから、終にはだんだん分る様になって、其年(明治十七年)の夏は運よく大学予備門へ入ることが出来た。〉

しかし、予備門の入学当初は席次も上だったのだが、成立学舎からの仲間などと遊んでばかりいるうちに下がっていき、予科二年の、ちょうど学制が森有礼文部大臣によって大きく変わる明治19年(1886)に落第してしまう。病気で「学年試験」が受けられず、頼んでも事務が「追試験」を受けさせてくれなかった為だったが、ここで漱石は〈改心〉をする。

〈そこで僕は大いに考えたのである。学課の方はちっとも出来ないし、教務係の人が追試

験を受けさせて呉れないのも、忙しい為もあるが、第一自分に信用がないからだ。信用がなければ、世の中へ立った処で何事も出来ないから、先ず人の信用を得なければならぬ。信用を得るには何うしても勉強する必要がある。と、こう考えたので、今迄の様にうっかりして居ては駄目だから、いっそ初めからやり直した方がいいと思って、友達などが待つて居て追試験を受けろと切りに勧めるのも聞かず、自分から落第して再び二級を繰返すことにしたのである。人間と云うものは考え直すと妙なもので、真面目になって勉強すれば、今迄少しも分らなかつたものも瞭然^{はつきり}と分る様になる。前には出来なかつた数学なども非常に出来る様になって、……こんな風に落第を機としていろんな改革をして勉強したのであるが、僕の一身にとって此落第は非常に葉になった様に思われる。)

漱石が英文学者となった切っ掛けは「英語」の受験勉強と改心後の猛勉強にあった。数学の授業も「英語」で行われていた当時、「英語が出来る」という才能は、明治という西洋化・文明開化の世の中に乗り出すための大きな武器となるスキルであった。

「英語」は現代でも、特にアメリカ発のインターネット登場以来、国際言語として唯一絶対とも言えるほどの強度をもつ言語であるが、事情は明治10年代(1877～86)の頃でも同じである。明治初年代の啓蒙家、福沢諭吉・中村敬宇らの学問・思想基盤は「英語」・イギリス・アメリカであり、明治19年に教育改革を断行した森有礼も同様である。

けれども明治初期の西洋化を推進した学問・思想基盤としては、「ドイツ語」・ドイツも大きな力を持っていた。主に医療と軍事に関してであるが、明治10年代半ばからは法学・政治学においてもドイツ色が濃厚になっていった。

特に「明治十四年の政変」でイギリス派の大隈重信(その背後にいる福沢諭吉)を政府は排除し、ドイツ派の井上毅の提言をもとに岩倉具視・伊藤博文は、憲法・政治制度・各種法律のほとんどすべてを「ドイツ」に依拠していくようになる。これは大隈・福沢らのイギリス派や、共和主義フランス派と言える自由民権運動推進派への対抗措置であったが、その背景には幕末・維新期からのドイツ派による土台作りと戦略があったことを、森川潤『ドイツ文化の移植基盤』⁽¹⁾は指摘している。

また当時、ドイツ派の政治学者・加藤弘之が東京大学総理となったことも大きい。法学部の穂積陳重はイギリス・ドイツ法学の双方に精通していたが、弟の穂積八東はドイツ一色であり、帝国大学時代になるとイギリス・フランスの法学・政治学は力を失っていく。

この「十四年の政変」以降の「ドイツ派」の台頭によって、その卓抜な〈ドイツ語能力〉のみで貴族院書記官長という勅任・高等官にまで登りつめたのが、漱石の岳父・中根重一(1851～1906)である。

若い頃の中根重一の学問志望は「経済学」で、そのために「ドイツ語」を修めようとしたと、『漱石の想い出』にある。

明治2年(1869)の版籍奉還の時点で数えの19歳だった中根は、なぜ医学や兵学ではなく、

経済学の勉強のために「ドイツ語」の会得を目指したのだろうか。父・中根忠治は、広島と岡山の間に位置する福山藩の、おそらくは下級藩士であった。福山藩では明治3年(1870)に「貢進生」の制度ができたとき、2名の学生を大学南校に送り出しているが、他に清水郁太郎という学生が明治4年1月に大学南校に入って「ドイツ語」を専攻している。そして、8月には大学東校へ入学した。彼は福山の藩校「誠之館」の出身で⁽²⁾、ちょうどそのころは大学の「医学」が「オランダ」「イギリス」から「ドイツ」へとシフトした時期で、その情報を得ていたのだろう。

幕府の医学所を引き継いで「大学東校」としていた明治政府(文部省の成立は、明治5年)は、それまで「オランダ」「イギリス」の医学に依拠していたが、学校運営を担っていた相良知安が「ドイツ医学」への転換を激しく訴えたことに応じて、ドイツ人医学者の雇用を認めて2名のドイツ人医師を招聘することにした。明治3年(1870)のことである⁽³⁾。

しかし、普仏戦争の影響で契約したドイツ人軍医2名の到着が遅れ、着任まではイギリス人医師が英語で教えていたので、清水はまず南校でドイツ語の勉強をしていたのだろう。

明治4年(1871)8月に着任したドイツ人軍医のミュラーとホフマンは、当時100名以上いた、年齢も学力も雑多な学生たちを、少ししてからテストで篩にかけて精選し、厳しく教育した⁽⁴⁾。ミュラー主導による授業はすべてドイツ語で行われ、英語の通訳はほとんど無かったようである。当時の日本人教師も英語・オランダ語しかできず、ドイツ語を話せたのは春風社というドイツ語塾を開いていた司馬凌海だけであった。

清水郁太郎は落伍することなく8年間の課程を修め、明治12年(1879)に東京大学医学部を優等で卒業し、第一回の文部省留学生としてドイツへ渡った。17年に帰国後、28歳で医学部教授(産科学)となるが、惜しいことに翌年病没した。

中根重一は、おそらく明治4年に清水郁太郎よりあとに藩から東京留学生として選ばれたと考えられる。そして大学南校か春風社のような塾でドイツ語を勉強し、明治5年末に第一大学区医学校(「東校」から改称)に入学したのだろう。清水は2学年先輩にあたる。当時は予科2年本科6年だったので、清水は本科1年目の学生だった。中根の1学年下には鷗外森林太郎がいた。

明治9年6月に着任したエルウィン・ベルツは、まだ神田和泉町の旧藤堂屋敷にあった医学校の校舎を、古い見苦しい建物で「引戸のある低い木造家屋が迷路のように組み合わせられている」と不満を述べているが、ドイツ語で講義を受ける学生たちへの評価は高い⁽⁵⁾。

〈着いてから五日で、すぐ生理学の講義を始めましたが、学生たちの素質はすこぶる良いようです。講義はドイツ語でやりますが、学生自身はよくドイツ語がわかるので、通訳は実際のところ単に助手の役目をするだけです。〉

前年まで医学校の教育・業務全般に君臨していたミュラーの手腕が窺える。

中根が明治5年末の入学であることは、星新一『祖父・小金井良精の記』⁽⁶⁾で初めて知っ

た。この中の引用に、晩年の小金井良精（1859～1944）の回想「東大医科の前身」（1940年1月17～19日 朝日新聞）があり、官立医学校時代の〈思い出の友〉として中根重一が登場する。中根がいかに勤勉な学生であったかがよく分かるので、記事の最後の部分を引用しよう。

〈医者でなく、友人に思ひ出の二人がある。

その一人は後に貴族院書記官長になった中根重一と、又内閣統計局長を最後に官を辞した花房直三郎である。

この二人は共に藤堂長屋に同じ飯をたべた仲間で、当時相当年を取つたものの中には酒をのみ、放蕩をするものがゐたので、これ等に対してこの中根、花房などその他僕等の同級は「我々は学生として自らをつゝしみ、大に勉強しよう」と盟約を結び、各自が記名、血判を押した事もある。その結果、僕等の級のもの、すべて学業はもとより、品行方正を旨として進んで来た。この二人もその首謀者格で医者になるのを嫌つて官途についたのであるが、当時のその血判帳は今何処にあるのであろうか。〉

後述するが、ここに登場する花房直三郎は、中根のその後の人生に深く関わっている。

中根重一は明治8年（1875）初め、25歳のときに予科2年だけで医学校を中退し、文部省管轄となつたばかりの「東京書籍館」（帝国図書館、現在の国会図書館の前身）の雇員となる。

小金井良精は明治13年（1880）に優等な成績で卒業し、23歳で緒方正規とともにドイツに留学した。小金井の日記には、ベルリンに着いたばかりの自分の世話をしてくれた先輩の一人として清水郁太郎も登場している。

中根重一は、このあと海外留学することなく、独学の「ドイツ語」で立身出世を遂げていった。夏目金之助は、中根鏡子と30歳で結婚したあと34歳のときにイギリス留学をするが、「英文学」をともに学ぶ仲間も居ない孤独な留学体験であった。

漱石と岳父・中根重一に共通点はあまりないが、「英語」・「ドイツ語」の語学の才能によって人生を切り開いたという点だけは共通している。

（2） 東京書籍館から新潟病院・医学校へ、という「回り道」

中根重一の父が福山藩の江戸詰めであったのかどうかについては、明治10年（1877）に通訳・助教として赴任した新潟県立病院・医学校の院長だった竹山^{たむろ}屯（1840～1918）の伝記（「実験眼科雑誌」第3年17号、1920年5月。肖像写真あり）に、中根の小伝も記載されていて、知ることができた。

「中根重一ハ備後福山藩中根忠治ノ長子、嘉永四年十月二十五日江戸ノ藩邸ニ生ル。明治

維新ノ際帰藩ス。明治四年藩ノ貢進生トシテ上京、医学ヲ志シテ大学南校ニ入ル緒方正規氏等ト同期生タリ。中途退学ス。明治十年新潟病院附属医学校御雇教師トシテ招聘ス。新潟ニ来レル後医学ヲ修メテ医師ノ資格ヲ得、明治十二年二月眼科講習生教授兼務ヲ命ゼラレ、竹山屯ト共ニ教師保阿屈^{フオック}ノ眼科講義ヲ訳記ス、眼科提要四巻コレナリ。明治十三年医術試験委員ニ任ゼラレタルコトアリ。明治十四年職ヲ辞シテ上京再ビ医学ヲ廃ス。先ヅ太政官ニ入り、次デ外務省ニ転ジテ翻訳官トナリ法制局、鉄道庁、通信省、貴族院等ヲヘテ累進シテ、明治三十三年十月内務省地方局長トナル。翌年辞職、明治三十九年九月十六日病ヲ以テ歿ス、享年五十六歳。」

ここから中根の父は「江戸詰め」藩士であり、明治2年の版籍奉還のあとに福山に帰藩したことが分かる。中根重一が「貢進生」であったという確証はないが、ほぼ同等の資格で「東京留学」を命ぜられたことは間違いないだろう。明治4年(1871)二十一歳の時と考えられる。

中根重一は江戸の丸山藩邸にあった藩校(丸山誠之館)に十八歳までは通っていたはずである。この学校で、「経済学」ならばドイツという発想を持っていそうな教師といえば、7代目藩主・阿部正弘が勝海舟からの紹介で招聘し、安政元年(1854)から丸山誠之館で教えていた杉亨二(1828～1917)が挙げられる。のちに「統計学」の祖と言われる社会学者である。杉は1860年から蕃書調所の教授手伝となるが、引き続き丸山誠之館でも教えていた⁽⁷⁾。

杉亨二は蕃書調所で西周(1862～1865オランダ留学)・加藤弘之と同僚になり、西と加藤は明治初期のドイツ派を代表する学者となるので、その影響を少なからず受け



日本眼科醫行像集(其十五)

像ノ氏屯山竹

像ノ氏一重根中

たことだろう。特に加藤弘之は、万延元年（1860）に蕃書調所に入ってからすぐに、プロシアの使節オイレンブルグ伯一行が来朝したのを契機に「ドイツ語」の学習を命ぜられ、以来「ドイツ学」の先駆者となっていった（大久保利謙『明六社』⁽⁸⁾）。のちに中根重一が所属する「独逸学協会」の創立者の一人である。宮川公男『統計学の日本史』⁽⁹⁾は、杉が医学から統計学へ専門を変えた理由の一つに「バイエルの識字率など教育事情を調べたドイツ」への関心を挙げている。むろん確証はないが、「経済学」ならドイツ（一般的にはアダム・スミスのイギリスが本流）、と言いきりそうな人物である。

ともあれ、幕末の下級武士の子弟が「立身」する早道は、ペリー来航（1853）以来ニーズが高まった「西洋語」と「洋学」を身につけることだった。阿部正弘はそのペリーが来航した嘉永6年の冬に江戸・中屋敷に新学館（丸山誠之館）を建設し、安政元年（1854）に福山誠之館を開設⁽¹⁰⁾、特に「洋学」を奨励した。杉亨二の登用もその一環である。阿部正弘の死（1857）と「安政の大獄」によって〈洋学志向〉は一時頓挫するが、明治維新後に〈攘夷〉から〈西洋化〉へと新政府は180度の転換を行ない、極端なまでの欧化主義を推し進めた。そこで求められた重要なスキルが英仏独の「語学力」だったのである。

この伝記には付記があり、「中根氏伝資料及写真」は医学博士・入澤達吉の好意による、とある。竹村屯は入澤達吉（1865～1938）の母方の叔父にあたり、竹村家の遺品を借用できたのだろう。

「医学ヲ志シテ大学南校ニ入ル」は、「大学東校」の誤りで、医学校中退後に東京書籍館の雇員だったという記述はない。「法制局、鉄道庁、通信省、貴族院等ヲヘテ累進シテ」の「貴族院」には「書記官長」が抜けていたりしているが、新潟赴任が明治10年、離任が14年でその後の来歴もほぼ正しいので信頼できる内容だと推定できる。

中根重一が官立医学校を中退し、文部省管轄の東京書籍館雇（正式には「東京書籍館並博物館雇」となったのは明治8年3月のことである。しかし西南戦争の影響で、経費削減のために東京書籍館は廃止が決まり、職員は解雇、中根は10年1月に失職した。書籍館の方は、実質的な館長だった永井久一郎（荷風の父）が東京府知事の楠本正隆に交渉し、東京府管轄の「東京府書籍館」として存続が決まった。

その後、中根重一は明治10年（1877）6月に新潟の県立病院・医学所に赴任するのだが、なぜ新潟の医学校だったのかは不明である。しかし、西村正守「東京書籍館の人々」⁽¹¹⁾に、東京府知事・楠本正隆は管轄とした東京書籍館の運営を新潟県令時代（明治5年5月～8年8月）の部下に任せたという記述があり、その理由が推察できるように思う。

『新潟県教育百年史』⁽¹²⁾にある通り、新潟病院は明治6年、もともと楠本新潟県令の指示のもとに新潟町戸長がフランス人医師を横浜から招聘して開設したのが起源である。9月の仮病院移転とともに生徒募集も行い、医学校を併設。7年10月に形式上は私立の「新潟病院」となり、新潟県権参事が院長を兼任した。このときオランダ人医師ファン・デル・ヘーデンが着任し、ドイツ医学が導入される。

明治9年(1876)4月に県立の新潟病院・医学所となり、8年3月から副院長兼助教だった竹山屯が運営にあたり、10年2月に正式に院長となった。

そして明治10年6月、契約満期となったヘーデンに代り、オランダ人医師フォックが招聘され、その通訳兼助教として中根重一が着任したのである。

つまり「新潟病院」は、開設から竹山屯の副院長就任まで楠本正隆県令のもとで発展した病院であり、ヘーデンに代わる外国人医師とその通訳の人事についても楠本が関わっていた可能性が高い。10年初旬から永井久一郎と書籍館の東京府移管について交渉していた楠本が、新潟病院・医学校に適任の通訳の件を永井に相談し、もと部下の中根が推薦されたとしても不思議はない。永井は東京府移管後も4月まで引き継ぎ業務を行っていた。

もう一つ、中根重一はなぜ官立医学校中退後に東京書籍館の雇員となったのか、という問題についても考察しておきたい。それは、どちらも「文部省管轄」だったから、であろう。

先の伝記には「医学」を志したとあったが、小金井良精の回想にある通り、中根は医者になるのではなく、あくまで「ドイツ語」の会得のために医学校で勉強していたと考えられる。勉強のためには多くのドイツ書を読む必要があり、まだ本郷移転前の藤堂屋敷の蔵書だけではなく、一ツ橋の開成学校(大学南校から改称)や、湯島聖堂にあった博覧会事務局所管の「書籍館」などにも通ったことだろう。

明治8年、湯島の旧昌平校内大成殿に文部省は新たな「東京書籍館」を設立した。旧蔵書の多くは他の機関に持ちさられ、残った蔵書の多くは教科書用サンプルの洋書ばかりだったという。内務省が認可し「納本」される新刊以外の書籍の充実を図ることが急務であった。

中でも「洋書」の充実を図るために、英語・フランス語・ドイツ語に堪能な職員の確保が必要だっただろう。そして、外国語が読める学生は湯島聖堂からすぐ近くの神田和泉町の「医学校」や一ツ橋の「開成学校」にたくさん居た。文部省は両校の学生に募集をかけたと考えられ、教師にも斡旋を頼んだことだろう。

しかし、ほとんどの学生が医学志望の中で、「文部省雇」になろうとする学生は「医学校」には少なかったに違いない。その中で中根重一は、ドイツ語の勉強をしながら仕事ができる書籍館職員に魅力を感じたに違いない。また、この頃から「官途」につく希望を持っていたであろうから「文部省雇」となることは本望でもあっただろう。

明治8年3月に「文部省雇」となったあと、おそらく9年に中根は結婚し、10年7月21日に長女・鏡子が生まれている。6月に中根は新潟へ赴任していたはずなので、出産には立ち会えなかっただろう。この時までには福山の父母を呼び戻し、のちに妻と鏡子を新潟に呼びよせたときには、両親は東京の家で留守居をしていたと思われる。

『漱石の思い出』で鏡子は、中根の祖父が内職をして家計を助けている姿を覚えていると語っているが、それは明治14年7月に新潟から帰京して、15年3月に「太政官雇」となるまでの、中根の〈浪人時代〉か「太政官御用掛 准判任官」で安給料だった頃のことだろう。鏡子が5歳～8歳くらいの頃である。

(3) 県立新潟病院・医学校の通訳兼助教

中根重一は、明治10年（1877）6月に県立新潟病院・医学校に着任した。

まず、『新潟大学医学部七十五年史』⁽¹³⁾ 所載、明治10年～13年の年末「職員一覧表」の一部を掲げておこう。

【明治10年（1877）】

職 員 兼 務	月 俸	氏 名	府 県
院 長	八十五円	竹 山 屯	新 潟
教 師	三百円	フ オ ッ ク	和蘭国
訳官兼助教	五十円	中 根 重 一	広 島

【明治11年（1878）】

院 長	八十五円	竹 山 屯	新 潟
教 師	三百円	フ オ ッ ク	和蘭国
助 教 事務監督	五十円	中 根 重 一	広 島

【明治12年（1879）】

院 長	九十円	竹 山 屯	新 潟
教 師	三百五十円	ホルテルマン	和蘭国
助 教 事務監督	五十五円	中 根 重 一	広 島

【明治13年（1880）】

校 長	百三十円	山 崎 元 脩	新 潟
院 長	百 円	竹 山 屯	同
助 教 監 事	五十五円	中 根 重 一	岡 山(マ)

中根は、オランダ人医師フォック（1845～1883）のドイツ語通訳と語学・医学教師として県立新潟病院・医学所に雇われた。当時の月給50円は、令和現在なら少なくとも50万円以上に当たる。27歳の月給としてはかなり高額である。漱石が明治28年に29歳で松山中学に赴任したときの月給は80円で、今なら60万円くらいと高額だが、これは前任の外国人教師の俸給額をそのまま受け継いだためだった。フォックは300円で月給300万円以上、明治前期の「お雇い外国人」の俸給は破格だった。

明治12年に刊行された『眼科提要』の奥付には、「広島県士族 中根重一」、新潟県第一大区小一区「医学町第千百八番地寄留」とあり、同所の住宅に居たのだろう。「医学町」は楠本正隆県令時代のネーミングである。

中根が行っていた講義通訳と講義について『七十五年史』は、「ドイツ語」と「ラテン語」を担当し、医学の方では「胎生学」「眼窩内諸病」「視器官能論」の講義を挙げ、フォックの

講義通訳では「局所解剖学」と「眼科学」を挙げている。

明治12年12月に、中根は新潟県の「第一回医術試験委員」となっているので、それまでに医師免許を取得したことは間違いない。14年の第2回でも試験委員を務めている。また、13年4月に竹山院長がコレラに罹患し、療養のために熱海に滞在した際には「病院長代理」を務めた。

明治12年7月、新潟病院・医学所が「新潟医学校」・附属病院に名称が変更された。またこの年、「医師試験」(医術開業試験)が制度として確立された。それまでは「地方の事情に応じて医師開業試験を施行」すべしとされていたのが、12年2月に「医師試験規則」が公布され、「内務省衛生局で試験問題を選び、これを地方に送って、各地で選ばれた試験委員が試験し、答案は衛生局に送り、ここで及落を判定して免状を出す」ことになったのである⁽¹⁴⁾。

中根重一の場合は、「地方公立病院に奉職し医療に従事した者は届け出で済む」(明治10年8月の内務省通達)制度があったので、それで医師免許を取得できたのだろう。

明治12年7月に竹山屯は「校長」となり、6月に満期辞職したフォックの後任として金沢医学校からオランダ人医師ホルテルマンを招聘したが、彼は翌13年8月に解任となり、新潟県出身で明治9年の「東京医学校」卒業生・山崎元脩が「校長」となった。

山崎元脩(1845～1910)は、明治4年の「大学東校」入学者で、ミュラーとホフマンの厳しいドイツ医学教育を受けた最初の学年である。山崎には、ホフマン口授の解剖学を翻訳した『医科全書解剖篇』27冊(1877～1880)がある。しかし彼も16年には解任され、新卒の東京大学医学部卒業生3名に取って代わられた。

中根が赴任した明治10年、11年ごろの「新潟病院」周辺の様子について『新潟県史』⁽¹⁵⁾は次のように書いている。

〈旧市街の南西のはずれには、明治十一年改築したばかりの新潟病院と、百工科学を教科に加え、師範学校と合併し、バードが「大学」と記した新潟学校が建っていた。広い敷地に並ぶガラス窓と白い壁が印象的な二階建ての壮大な建て物で、遠く内野からもみえたという。〉

「新潟病院」は明治10年11月に新築落成し、23日に「移転式」が行われ、永山盛輝県令、竹山屯院長、それにフォックが祝辞を述べた⁽¹⁶⁾。通訳したのは中根であろう。

「バード」は、冒険家として著名なイギリス人女性イザベラ・バード(1831～1904)である。明治11年7月初めに新潟を訪れた。『日本奥地紀行』第20報(普及版では「第16信新潟にて 七月九日」)には、新潟病院のある「医学町」「学校町」付近について次のように書いている。

〈医学校が付属する大きな病院やケンチョウ〈県庁〉、サイバンチョウ〈裁判庁〉と言われる裁判所、複数の学校、兵営、そしてほかのどれにもひけをとらない銀行の大きな建物はすべてヨーロッパ風であり、進取

的で存在感はあるが、ごてごてしていて趣に欠ける。たいへんうまく設計され、砂利をきれいに敷いた遊歩道のある大きな公園もある。〉（『完訳 日本奥地紀行』⁽¹⁷⁾より）

「大きな公園」は楠本県令が明治6年に造園した「白山公園」で、今も健在である。そして、原注に「新潟病院」のことを書いている。

〈* この病院は大きくて換気もよいが、多くの入院患者がやってくるまでにはなっていない。外来患者は非常に多く、眼病が目立つ。日本人の主任医師はこの病気がこの近隣で蔓延しているのは、じめじめしていること、砂や雪で陽の光が反射することと換気が不十分で炭火の煙霧がひどいことに起因するとみている。〉

「主任医師」は竹山屯のことだろうが、当然ここに中根重一も居合わせたことだろう。

「眼病が目立つ」ことについては、バードが訪れた二ヶ月後、9月17日に北陸巡幸中の明治天皇が新潟病院に行幸された際、新潟県には眼病患者が目立つことを指摘されて、その対策費として金一千元を県に下賜されるという出来事があった。

院長の竹山と中根は、12年2月に「眼科講習所」を設けるなどの対策を講じたほか、眼病対策の一環として、フォックの眼科学講義を翻訳して、5月に『眼科提要』として発刊した。

『日本眼科の歴史 明治篇』⁽¹⁸⁾に、「明治期の医学校では何処も眼科学の講義はかなり詳しいものであったようである。教科書としては明治10年代には『東京大学医学部日講紀聞、医科全書』、『眼科提要』、榊、甲野の『眼科学』、『井上眼療要』などが用いられたようである。」とある。中根の訳した『眼科提要』は、医術開業試験に必須だった眼科の講義や勉強に大きな貢献をしていたようだ。

そして明治12年（1879）には、全国的な災厄として「コレラ」の大流行が起った。特に新潟では8月5日に、コレラ騒動に起因する民衆の大暴動が起こっている。「新潟病院」にも大きな影響があり、竹山も中根も対応に苦慮したことだろう。

翌13年6月に、中根重一は『虎列刺病論』を単著で発刊した。その「例言」の冒頭に次のように書いている。

〈此書ハ予カ越後国新潟ニ於テ諸医員ノ請求ニ由テ虎列刺ノ病理ヲ講義スルニ方テ独逸国内科学の大家ニーマイル氏等ノ原書中ヨリ虎列刺編ノ要領ヲ抄訳シ且ツ独逸国ノクンツェ氏及ハルトマン氏等ノ内科書ニ就テ緊要ナル論説ヲ翻訳シ旁ラ予カ嘗テ親ク聴講スル所ノ独蘭諸家ノ所説ヲ参考附載シテ以テ一冊子トナシ同志者謄写ノ勞ヲ省カン為メニ忽卒ノ際刊行スルモノナリ〉

この書は、コレラについて医員や医師たちに講義をするときの教科書的パンフレットのようだ。発行者は「佐藤敬三郎」、「訳者 中根重一 新潟区医学町通六番地寄留」と奥付にあ

る。一小冊子にすぎないが、これが中根重一の単著デビューではある。

「予が嘗て親しく聴講する所の独蘭諸家の所説を参考付載して」とあるが、29ページにホルテルマンの処方介绍されている。名が挙がっていなくとも、フォックや官立医学校のミュラー、ホフマン、シュルチェ等からの教えも反映されているだろう。

このように県立新潟病院・医学校で存在感を増していた中根重一は、明治14年7月の学年末に辞職をしている。その理由を、校長がドイツ語の堪能な日本人医師になった影響かとも考えたが、おそらく13年末か14年初めに、妻と鏡子を新潟に呼びよせていることから、その時点では新潟に長く勤めるつもりであったように思える。

そこで浮上してくるのが、「独逸学協会」の設立との関係である。

(4) 太政官の翻訳官へ（「独逸学協会」員となる）

「独逸学協会」は、「独逸ノ文化ヲ移植セントスル」目的で、北白川宮能久親王のもと、品川弥次郎、桂太郎、青木周蔵、平田東助、加藤弘之、山脇玄、西周ら、主にドイツ留学経験者が集まり、設立されたものである⁽¹⁹⁾。

創立は、明治14年（1881）9月18日とされている⁽²⁰⁾。10月12日には「明治十四年の政変」が起こる。政変と同時に、「憲法」と「議会」の制定を約束する詔勅が発せられ、「国会」の開設は9年後の23年とされた。

イギリスの議会制度やフランスの共和制を望む「民間」の声に対抗するために、「政府」は君主権・行政府権の強いドイツの憲法・議会制度の採用を目指し、15年3月に伊藤博文が憲法調査の使命を帯びて渡欧した。

伊藤は結果として、ドイツそしてオーストリアの憲法・議会制度・政治制度を学んで、翌年に帰国するが、周知の通り、もし大隈重信が極端なまでに民主度の高い、しかも2年後の国会開設を約束する議会制度案を上奏しようとするという事件が無かったならば、こうまで急激な〈ドイツ派〉への鞍替えはなかっただろう。

ドイツ憲法・制度の導入を主唱していた井上毅（1845～1895）は、特に政変以後、ヘルマン・ロエスレル（1834～1894）など御雇ドイツ人を重用するようになる。伊藤が帰国するまでに、ドイツの法律・制度を理解し、太政官ほか政府内部に喧伝する必要があるからだ。それには、ドイツで法律や政治学を学んできた平田東助、山脇玄、木下周一、荒川邦蔵らの力が必要で、さらに「ドイツ語」の翻訳・通訳能力に長じた者を広く求めたに違いない。

「独逸学協会」は、そういう「ドイツ語」能力の持ち主の照会先として機能したことだろう。ドイツの法学や政治学に通じた人材は、当時は極めて少なかった。

中根重一が明治15年3月に「太政官雇」になるには、以上のような背景があったと考えられる。独逸学協会については詳細な検討が必要となるので次回の論考に譲りたい。

ここでは、中根が新潟から帰京して「官途」を目指した理由が、もし「独逸学協会」に関

係するのなら、そのキーパーソンは誰かということを考える。そのときに浮かんでくるのが、「関澄蔵」という人物である。

関澄蔵は、明治7年に新潟県樹芸場に技師として赴任、10年に「新潟農事試験場」教員となり、8月から医学所で基礎教育科目の理化学を教えている。注目されるのは、『新潟大学医学部七十五年史』の教員紹介に、「広島県士族、独逸学協会会員として登録されているが、開成学校卒業後、欧米を巡遊して帰国した知識人であった。」とあることだ。

『新潟県農事試験場百年史』⁽²¹⁾には、明治11年に農事試験場教師に就任とあり、「場の組織を整備して生徒を各学科に編成した。同氏はドイツ語に堪能だったのであらゆる学科を翻訳教授して本県に欧米の農学を紹介した。」とある。

明治15年12月発刊の『農業捷徑』奥付には、「広島県士族 関澄蔵 東京神田区駿河台西紅梅町十四番地」とあり、「凡例」は9月に書かれているので、それ以前には上京していた。「凡例」には、「斯書ハ余カ新潟勸農場ニ在テ学生ニ教授シタル備忘録ヲ抜粋セルモノニシテ専ラ師範学校中学校ノ学課書トナシ」とあり、明治19年12月には平塚定二郎（雷鳥の父）と共訳で『農業経済論』を独逸学協会から刊行した。

中根重一がいつ独逸学協会の会員となったかは不明だが、15年には登録されている。新潟医学校で、同じ広島県士族、高いドイツ語能力者として関澄蔵と交流があれば、中根の辞職と上京に関わりがあっても不思議ではない。「独逸学協会」についても情報交換をしていただろう。

この関澄蔵よりも深く関係していそうなのが、前述した官立医学校の同級生・花房直三郎（1857～1918）である。

島村史郎『日本統計史群像』⁽²²⁾によると、花房直三郎は岡生れ。池田家の藩士の三男で、長兄は明治初期の有名な外交官・花房義質である。明治元年（1868）、12歳で藩費留学生に選ばれ上京し、ドイツ人ホルツについてドイツ語を学んだ。

次に「明治12年、ドイツ語教員として東京外国語学校で教鞭を取っていたが、明治14年5月に退職」と続くが、前述の通り、明治5年に「官立医学校」に入学し、少なくとも予科2年間は在籍していた。

14年6月に渡辺洪基・原敬の「海内周遊」視察旅行に随行している。15年（1882）、26歳のとき農商務省に出仕、統計課に勤務した。

そのあとも「17年には外務省に転じ」とあるが、16年から17年にかけて、花房直三郎は「太政官文書局御用掛」となって中根重一と同僚になっているのである。

『太政官職員録』（明治17年3月1日改）の「太政官文書局」の最後の方に、「御用掛 准判任」として、

〈中根 重一 広島県士族 神田区裏神保町四番地〉

〈花房直三郎 岡山県士族 京橋区築地三丁目四番地〉

と、掲載されている。

そして同じ文書局の「一等属」の所には、

〈関 澄蔵 広島県士族 麹町区永田町一丁目十七番地〉

と、ある。16年には関澄蔵も「太政官文書局」に出仕していたのだ。

明治16年5月に、「官報」刊行のために発足した「太政官文書局」は、〈海外通信〉や〈海外事情〉の記事充実のために、外国語のエキスパートを集めていた。その中で「ドイツ語」に関しては、独逸学協会員を中心に才能のある適任者を集めていたことが分かる。

文書局長は、独逸学協会創立者の一人・平田東助であり、太政官権少書記官と内務権少書記官を兼ねた局員の「荒川邦蔵」も幹部会員の一人である。

「官報」の刊行に関しては、14年ごろから様々な意見があり、特に井上毅は積極的に建言をしていたが、「官報」の発行が決まった15年当時に井上毅に近い伊藤博文は渡欧中で不在のため、山県有朋が刊行の主導権を握り、山県に近い平田東助が「文書局長」、同じく小松原栄太郎が「幹事」に選ばれた。

鈴木栄樹『「官報」創刊過程の史的分析』⁽²³⁾によれば、15年3月末に「官報」の刊行準備のため太政官中の内閣書記官に「別局」が設けられ、9月にはメンバーの拡充があった。この中に中根重一と花房直三郎が含まれている。

別局では、欧米の「官報」や政府新聞についての調査のため、御雇外国人のロエスレル、ボアソナードらへの質疑がなされた。「公文別録」にある中根重一訳と花房直三郎訳の調査資料のいくつかが鈴木論文で挙げられている。

〈李国官報ノ件ニ付ロイスレル氏へ質問ノ答議 中根重一筆記〉

〈李国官報ノ設置ニ係ル布告類 御用掛中根重一〉

〈ロエスレル氏へ質疑 花房直三郎訳〉

〈官報郵送ノ件ニ付ロエスレル氏へ質問ノ答 花房直三郎訳〉

〈無題〔プロシアの官報の種類〕「中根重一訳」〉

〈李国ノ太政官組織概略 中根重一訳 独乙リヨンネ氏行政論中摘訳〉

中根や花房の仕事は、主にロエスレルへの質疑とその答えの通訳・翻訳、案件に関係するドイツ書の摘訳などであることが分かる。

明治16年5月10日に文書局が設置され、参議山県有朋が文書局監督となる（翌年2月に井上馨に交代）。文案課長はジャーナリストだった関新吾、翻訳課長はドイツ留学経験者の荒川邦蔵。「独逸文掛」には、荒川・関のほか、中根重一、花房直三郎、長尾俊二郎の3名。「英文掛」が4名、「仏文掛」が3名（陸羯南を含む）。また、文案課の「審査掛」には原敬がいた。陸も原も、中根・花房と同じ「御用掛 准判任」であった●。

ほかに「現員」として久保田貫一（少書記官）、関澄蔵（一等属）らがいた。

中根と花房のここから先の人生を概観しておく、花房直三郎は17年に外務省に移り、中根重一も18年に外務省翻訳局に移るが同僚ではなかった。中根はその後、独逸学協会を足場に翻訳官から法制官僚となり、第2次伊藤内閣の明治27年（1894）44歳のときに貴族院書記官長に栄進する。

花房直三郎は、18年に特命全権大使伊藤博文の随員として清国に行き、伊藤に目をかけられる。21年に枢密院書記となり、憲法制定の事務に参加。明治25年、第2次伊藤内閣成立とともに総理大臣秘書官。27年の日清戦争時は、広島に大本営が設置され「大本営附」となる。この時、貴族院・衆議院両議会も広島に移転し、2度の国会が開かれて、貴族院書記官長の中根も広島にいたので、旧交を温めた可能性はある。

その後の花房直三郎は、明治30年（1897）に内閣統計課長となり、翌年、内閣統計局長に格上げされ、以後、大正5年（1916）の辞任までその地位にあり、日本の「統計」の発展のために尽力した。大正7年に病没、享年62歳。

一方の中根重一は、明治31年（1898）に不本意な形で貴族院書記官長を辞任したあとは、33年～34年にかけての半年ばかり、第四次伊藤内閣の内務省地方局長であった時期を除いては不如意が続き、特に相場で失敗したときの借金に苦しめられ、内証は火の車となっていった。日露戦争後、「安田保善社」に入り復活を期していたが、明治39年（1906）に病没、享年56歳。

日清戦争後の二人の運命は対照的で、明暗が大きく分かれてしまった。

中根重一が新潟を去り、東京で「ドイツ語」スキルを元手に生きていこうと決めたときに、花房直三郎からの何らかの関与や影響があったかどうかは不明である。二人が「太政官文書局」で顔を合わせていたとき、どんな関係であったかは分からないが、年齢は少し離れていても〈医学校時代の学友〉、〈ドイツ語〉修得の戦いにおける〈戦友〉であったに違いない。

他にも可能性としては、中根重一が東京書籍館の雇員時代に、何らかの伝手により、のちの独逸学協会関係者との関係があって、14年9月に協会が創立されることを事前知って上京を決めたというケースもあり得る。しかし、妻子を呼び寄せていたのに辞職した事実を考えると、新潟医学校に居づらい事情があったと考えた方が妥当かもしれない。たぶん中根は背水の陣を構えて上京したのだと思われる。

以上、中根重一が新潟医学校に赴任して、4年で帰京し「太政官御用掛」になるまでを見てきた。やはり何といても中根重一という人物にとっては、卓抜なドイツ語能力で翻訳・通訳をこなし、ドイツ書の読解と紹介を精力的に行なう仕事が「天職」だったと言えるだろう。

「政治家」を自任し、千円の金をすぐに倍にすることが出来ると豪語する世俗的な「怪力」の持ち主として『道草』に描かれている中根重一は、政府高官となった順境に驕っていた頃

の一面が強調され過ぎているように受け取れる。

(2024年11月4日 稿)

注

- (1) 森川潤『ドイツ文化の移植基盤』(2005年 雄松堂出版)
- (2) 『誠之館百三十年史』(1988 福山誠之館同窓会誠之館百三十年史刊行委員会)
- (3) 吉良枝郎『明治期におけるドイツ医学の受容と普及：東京大学医学部外史』(2010年 築地書館)
- (4) 同上
- (5) 岩波文庫『ベルツの日記』
- (6) 星新一『祖父・小金井良精の記』河出文庫版より
- (7) 『杉亨二自叙伝』(1918)
- (8) 大久保利謙『明六社』講談社学術文庫版
- (9) 宮川公男『統計学の日本史：治国経世への願い』(2017 東京大学出版会)
- (10) 注(2)に同じ。
- (11) 「図書館学会年報」(20巻1号 1974年7月)
- (12) 『新潟県教育百年史 明治編』(1970 新潟県教育庁)
- (13) 『新潟大学医学部七十五年史』(1994)
- (14) 『日本眼科の歴史 明治篇(日本眼科学会百周年記念誌；第1巻)』(1997 日本眼科学会)
- (15) 『新潟県史 通史編6(近代1)』(1987)
- (16) 注(13)に同じ
- (17) 金坂清則訳注『完訳 日本奥地紀行2』(2012 平凡社東洋文庫)
- (18) 注(14)に同じ
- (19) 『独逸学協会学校五十年史』(1933)
- (20) 新宮讓治『獨逸学協会学校の研究』(2007 校倉書房)
- (21) 『新潟県農業試験場百年史』(1994)
- (22) 島村史郎『日本統計史群像』(2009 日本統計協会)
- (23) 鈴木栄樹「『官報』創刊過程の史的分析」(『日本近代国家の形成と展開』1996 吉川弘文館より)

A Study of Shigekazu Nakane — Soseki Natsume's Stepfather (2) :
From the teacher in Niigata Prefectural Medical School
to Official German translator

Toshiki Hashikawa

Shigekazu Nakane, Soseki's stepfather, learned German language from German doctors at the *Igakko* (now the Faculty of medicine, University of Tokyo), dropped out the *Igakko* in the second grade of Yoka , and got a position at *Tokyo Shojakukan* (now the National Diet Library) in 1875. His original goal was to be a government bureaucrat by learning 'German'.

But Nakane lost his employment because *Tokyo Shojakukan* got excluded from national institutions by the government's convenience. Then he got a new job at Niigata prefectural hospital and medical school in 1877.

This essay mainly focuses on Nakane's life in Niigata Prefectural Medical School days, studies his achievements, and relates in detail.

And then, Nakane resigned from the school and came to Tokyo in 1881, got a post as an employee of 'Dajoukan,' the central part of the Meiji government, in 1882. He engaged in German translation.

This essay is the sequel of my essay in 2018 "A Study of Shigekazu Nakane — Soseki Natsume's Stepfather(1)"B.